参考資料２

第２回 名寄市立小中学校のあり方検討委員会 会議録要旨

日　時：令和８年７月 30 日（木）18：30 開会

場　所：名寄市役所 名寄庁舎４階大会議室

出席者：今野委員長、尾崎委員、黒嶋委員、髙橋委員、稲本委員、草薙委員、久保委員、今野委員、谷口委員、飯村委員、合掌委員、金澤委員（11 名）

事務局：伊藤部長、若林課長、伊野主査、齊藤主事（４名）

資　料：資料１～６のとおり

※資料３には、他自治体の資料等、著作権上の配慮が必要な内容を含むため、ホームページでの公表は行いません。

※資料 6-2 は、会議終了後、委員意見等を踏まえてアンケート設問内容を修正したため、会議当日時点の資料はホームページに掲載していません。なお、修正後のアンケート内容及び実施結果については、後日ホームページで公表します。

１　開会

〇若林課長より開会の挨拶を行った。

２　委員長就任挨拶

〇今野委員長より挨拶を行った。

３　議事

（１）説明事項

①スケジュールの更新（今後の展開）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（資料１）

〇事務局より資料に沿って、児童生徒・保護者アンケート実施によるスケジュールの変更について説明を行った。

②第３次総合計画（素案）※小中学校教育関連のみ抜粋・・・・・・・・・・・・・（資料２）

〇事務局より資料に沿って、名寄市の学校教育の基本方針について説明を行った。

③本日の意見交換会のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（資料３）

〇事務局より資料に沿って、第１回検討委員会で出された意見を踏まえ、本日の意見交換会で議論するテーマや視点を確認するとともに、特色ある学びや国際化・多様化に関する他自治体の取組事例について説明を行った。

（２）意見交換会・フリーディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（資料４）（資料５）

〇A・B グループに分かれて、意見交換を行った。

〇特認校である中名寄小学校、智恵文小中学校の取組について、各校長より資料に沿って説明を行った。

【A グループ】

●「目指すべき姿」

①名寄市の子どもたちにどのように育ってほしいか

・自ら問いを立て、学んだことや地域に誇りを持って、どこに行っても仲間と価値を生み出せる子ども

・自分の目標を自分で見定め、努力できる子ども

・自分の将来の姿を想像できる子ども

・善悪の区別ができる子ども

・夢を持って成長できる子ども

・自主性・社会性を持った子ども

●「目指すべき姿に向けた必要な取組」

②学校規模ごとの魅力・課題・課題の対応策、多様化・国際化対応等

・普通規模校は多様性を学べる

・極小規模校は教員の児童生徒一人ひとりへのサポートが手厚くなる半面、集団活動の教育効果が低下しかねない

・現在の学校規模だけではなく、将来的にすべての学校の規模が縮小していくことを見越して各学校の連携を強化するべき

・子どもが接する大人の数を増やしたい

・子どもたちが、各学校規模のメリット・デメリットを取捨選択できるように、学校選択制を導入できたらよい

・英語圏だけでなく、名寄とつながりのある外国（台湾等）との交流

・多様化、国際化については学校規模は関係なく、取り組むことができる

③極小規模校でしか得られない教育的価値の最大化

・スクールバス等など、子どもの通学状況の改善

・特認校制度や現在の学校活動のさらなる周知

・英語や農業等に特化して特色を持たせる

・9 年間一貫した教育ができるというメリットを生かす（冬季スポーツ、英語等）

・小学 1 年生からの英語学習のニーズは高い

・年齢制限のない資格を目指すのもよい（天文、英語、生物、調理、美術等）

・教科書に沿った英語学習だけでなく、日常で使える英会話学習のニーズもある

・現在、智恵文小中学校では、農業体験で収穫した野菜のレシピづくりを大学と連携して実施している。多岐にわたり、大学との連携を深められたらよい

【B グループ】

●「目指すべき姿」

①名寄市の子どもたちにどのように育ってほしいか

・自分で進路、やりたいことを判断できる子ども

・主体的に取り組み、自信を持ってチャレンジできる子ども

・人生を切り拓く力を持ち、社会の変化に対応できる子ども

・主体性・自律性・自信を持ち、食や農業を学んだ子ども

●「目指すべき姿に向けた必要な取り組み」

②学校規模ごとの魅力・課題・課題の対応策、多様化・国際化対応等

・幼小中高大の連携の継続

・地域との連携

・農業体験で育てた農作物を活用した給食メニューの開発や大学の栄養学科と連携して商品化し、ふるさと納税の返礼品とするなど、子どもが主体で行う一次産業と教育の連携

・通学支援、校外学習への送迎等を行う教育活動専用バスの整備

・言葉が理解できなくても、外国人とのスポーツやダンスなど、一緒に体を動かすことで自然なコミュニケーションがとれて交流を深めることができる

・外国人との伝統芸能を通じ交流によって双方の文化に触れることによる国際化意識の醸成

③極小規模校でしか得られない教育的価値の最大化

・特認校制度や学校活動の積極的な情報発信

・名寄の当たり前（農業体験・豊かな自然・地域のつながり）は、都会から見ると非日常体験であることを再認識し、地域資源を活用したカリキュラムの特色化を図り、市全体でＰＲすることで、「選ばれる可能性」が高まる

・教育移住に取り組む場合、移住施策として、住居や仕事の確保など、行政側の受け入れ準備を進める必要がある

・英語・水泳・体操など、未就学児に人気の習い事を特色あるカリキュラムとして取り組む

・市内のどこからでも通える通学サポート（スクールバス等）が必要

（３）アンケートについて・・・